HCAP
HARVARD COLLEGE IN ASIA PROGRAM

’09 HCAP
Tokyo Conference
活動報告書

◆目次

1. 代表挨拶
2. ’09 Tokyo Conference 概要
3. プログラム日程
4. 各プログラム概要
   i. セクション別フィールドワーク　教育制度セクション
   ii. セクション別フィールドワーク　産業セクション
   iii. セクション別フィールドワーク　精神セクション
   iv. 全体でのプログラム　京都企画
   v. 全体でのプログラム　高校生交流プログラム、ホームステイプログラム
   vi. 全体でのプログラム　ディスカッション
5. 一年間の振り返り
   i. プログラム内容について
   ii. プログラム運営について
   iii. 引き継ぎについて
   iv. 渉外について
   v. 予算について
● 資料　会計報告

1. 代表挨拶

2008 年 6 月に結成した HCAP 東京大学運営委員会 3 期は紆余曲折を経つつも、その集大成である HCAP Tokyo Conference 2009 を無事完遂させました。ここに至ることが出来たのも、皆様方のご支援・ご助言があってこそだと、心の底から感謝いたしております。本当にありがとうございました。

またこの成功までに、多くの試練や衝突、笑顔がありましたが、恐らくメンバーの誰に聞いても「有意義だった」という感想に行きつくのではないかと思います。1 年生主体で作り上げていくカンファレンスは、数多くの苦労がありました。しかし、その一つ一つを解決していくプロセスの中で、互いの絆が深まり、また自分が成長していくことをはっきりと感じることができました。これこそが HCAP 東京大学が持つ価値であるのであると思います。

アプリケーション締切直前、和館の一室を借り、仕上げをすることとなりました。しかし、隣の部屋では別の学生団体が懇親会を開いており、絶え間なく笑い声が聞こえてきました。眠い目をこすり、苦手な英語に立ち向かっていた私達にとっては大変な苦痛であり、もう投げだしてしまいたいと思った人もいたかもしれません。今思い返してみると、それが最初の難関でありましたが、このような試練を乗り越え、アプリケーション通過を聞いた時には心からの喜びと安堵感が自然と湧いてきたのを覚えています。

以後、本格的に東京カンファレンスの準備が始まりました。多くの企業に支援やプログラムへの協力をお願いに訪れ、同時に多くのアドバイスを頂きました。代表という立場上、そのような場に人一倍出向きましたが、毎回毎回が学びの場で、そこでなければ得ることができない経験を数多くさせていただきました。ここでの経験は今後の大学生活、さらには社会人になってからも大きな意味を持つものであると実感しています。

2009 年 2 月、ついに Harvard Conference の日となり、派遣メンバー10 名は渡米しました。1 週間で、さまざまなプログラムをこなしましたが、どの企画よりも心に残ったのは、他のアジアの学生との交流でした。普段はニュースなどで聞くアジアの様子も、同じ学生の生の声で聞くとまた違ったものと思え、同じアジアの国々への興味が一層大きくなりました。ここで出会った偶然を、今後活かしていきたいと、心から願っております。

帰国後すぐに東京カンファレンスの準備を再開しましたが、ミーティングを繰り返してもなかなか意見が纏まらず、メンバー内でも摩擦が生じていました。カンファレンス本番が始まっても、疲れなどからか、軋轢があったように思います。しかし日が経つにつれ、それも解消していき、心の底から交流を楽しんでいる様子が多く見えるようになっていきました。最終日、見送りの際には両大学の学生から数多くの涙が流れ、その様子を見、皆にとって実に内容の濃い、充実した一週間であったと自信を持って言うことができました。

約 10 か月の活動を終え、当初の自分では想像もできないほど成長した、という実感があ

ります。また、今後何がやりたいか、この点が少しはっきりし、残り 3 年の大学生活が楽しみで仕方ありません。こういった「気づき」を与えるのが HCAP 本来の姿であり、またその価値を後輩に伝えていくということを、全力でやっていきたいと今は考えています。

HCAP 東京大学運営委員会 3 期代表　仲田健治

2. '09 Tokyo Conference 概要

主催　HCAP 東京大学

日程　2009 年 3 月 21 日～3 月 29 日

場所　東京大学駒場キャンパス

参加者　東京大学生 18 名、帝京大学生 2 名、ハーバード大学生 16 名

テーマ　Education of Enlightenment; search new 'Education' from the past to the future

内容　上記テーマに即したセクション別フィールドワーク（教育制度・産業・精神）
HCAP Japan Business Conference 2009
京都企画（寺社参拝、講義、体験）
高校生との交流・ホームステイプログラム
最終日ディスカッション

後援　東京大学教養学部

協賛　株式会社　ベネッセコーポレーション
帝京大学
株式会社　栄光
社団法人　学士会
国際教育振興会
アルファ・アンド・カンパニー・インク・ジャパン
井野孝紀様
江川昌子様
Richard Eastman 様

協力　トヨタ自動車株式会社
東京ミッドタウンマネジメント株式会社
学校法人岩崎学園
株式会社臨界セミナー
神宮司庁広報室広報課
株式会社インナースケッチ
京都外国語大学ジェフ・バーグランド教授

- **Education of Enlightenment; search new 'Education' from the past to the future**

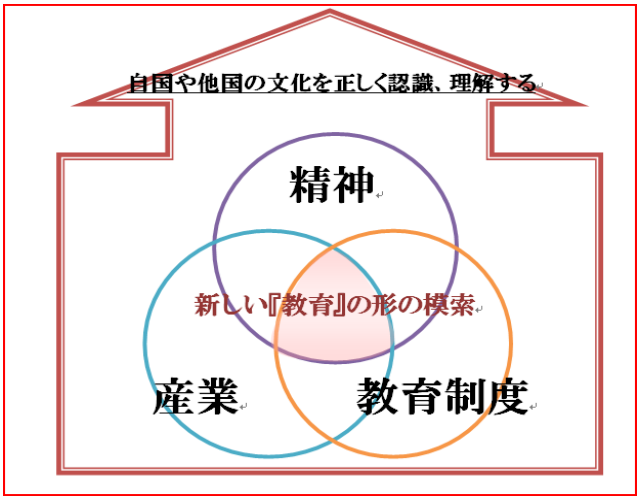
今年度、我々は東京カンファレンスを開催することで、正しい日本の姿をハーバード生に紹介し、日本の特長を理解してもらい、今後のグローバルな世界で必要な「教育」は各国の特長を充分に生かしたものであるという考えを共有したいと考えました。

我々はEducationという言葉を学校教育に限った狭義のものではなく、伝統や文化、知恵の伝承、思想や価値観の育成といったすべての啓発的な行為を指す、広義のものとして捉えました。それは、今後の世界で真に価値を持つのは学校で教授される知識だけではなく、自己の社会・文化の誇りであり、また他の社会・文化から受容する知恵であると考えたためです。

先にも述べたように、今回のカンファレンスでは、日本の姿をハーバード生に体感してもらい、その中から世界をより良い方向に導く可能性があるものを見出すことを大きな狙いとしました。しかし、ただ一口に「日本の姿」と言ってもそれは多方面に渡ります。そこで我々は今回の東京カンファレンスに際して、日本の様々な側面のうち、精神、産業、教育制度という 3 つを取り上げました。これらは日本の特徴的ということのできる重要な側面であり、ぜひ世界に知ってほしいものであると考えたためです。

そこで精神、産業、教育制度の 3 つのセクションに分かれ、それぞれ独自のフィールドワークを行うことで、日本の多様な地域色について知ってもらい、また、東西、古今の都である東京と京都を実際に見て回ることで、より広く深く日本について理解してもらおうと考えました。

各プログラムより、ハーバード生に今まで知らなかった日本の特長を知ってもらう。そして、今後の世界では日本に限らず各国独自の社会・文化に目を向け、それを最大限生かしていくことが大切であり、それらを勘案した広い意味での「教育」が必要であるということに気付き、共にそのあり方について考える機会としたい。これが私たちのカンファレンスの趣旨であり、故に Education of Enlightenment; search new 'Education' from the past to the future というテーマを設定しました。



3. プログラム日程

0 日目（3 月 21 日）

ハーバード生到着

オリエンテーション・ウェルカムパーティー

1 日目（3 月 22 日）

キャンパスツアー

東大教養学部による歓迎式典

東京観光（浅草）

HCAP Japan Business Conference 2009

2 日目（3 月 23 日）

各セクション別フィールドワーク

≪教育制度セクション≫

- 茶道体験
- 日本科学未来館見学

≪産業セクション≫

- トヨタ自動車での講演会
- 日本科学未来館見学

≪精神セクション≫

- 茶道体験
- 浜離宮散策、東京ミッドタウン見学

3 日目（3 月 24 日）

各セクション別フィールドワーク

≪教育制度セクション≫

- 専門学校企画
- 予備校企画

≪産業セクション≫

- 東京ミッドタウンでの講演会、見学
- ファッション企画

≪精神セクション≫

- 古武術講義
- ファッション企画

4 日目（3 月 25 日）

各セクション別フィールドワーク

≪教育制度セクション≫

- 日本教育大学院大学校訪問

≪産業セクション≫

- トヨタ自動車田原工場見学、トヨタ会館見学

≪精神セクション≫

- 伊勢神宮参拝

京都にて合流、カラオケ大会

5 日目（3 月 26 日）

鹿音寺金閣参拝

ジェフ・バーグランド教授の京町屋訪問、講義

和菓子作り体験

清水寺参拝

6 日目（3 月 27 日）

ベネッセ・東京大学 HCAP 主催　高校生との交流イベント

「大学の意義とは？」

ホームステイプログラム（※ハーバード生のみ）

7 日目（3 月 28 日）

ディスカッション

「今回のカンファレンスを振り返って」

フェアウェルパーティー

8 日目（3 月 29 日）

ハーバード生帰国

反省会

4. 各プログラム概要

i. セクション別フィールドワーク
教育制度セクション

①セクション内容
ⅰ）茶道体験
ⅱ）日本科学未来館見学
ⅲ）専門学校訪問
ⅳ）臨海セミナー（学習塾）見学
ⅴ）日本教育大学院大学訪問

②背景
高等教育の大衆化により、日本の教育制度はかつてない多様性を見せている。しかし、我々が歩む多くの進路は大学までの単線型の進路であり、専門学校などといった進路はまだまだ進路先としては大学等の高等教育機関に比べ低くみられる傾向がある。こうした現状の背景として、学力偏重の我が国の評価制度が取り上げられている。我々は学力重視の教育制度をさまざまな視点から捉えなおすことで、マクロレベルでは日本の教育制度の可能性を見出す一方、ミクロレベルでは教師に焦点をあて、教育制度の担い手の視点を取り入れることで、教育の「享受者」だけでなく、「提供者」としての視点をも獲得し、さらに深く教育制度の問題をとらえる機会にしようと考えた。

③目標
ⅰ）教育制度の「提供者」の視点を獲得すること
ⅱ）単線型の大学への教育制度の進路とは違った道を探ること

④セクションとしての達成点・反省点
〈達成点〉
・日本の教育制度の多様性を見ることができた…（ⅰ）
・「理想の教師とはどのようなものか」という問題を扱うことで、教育を提供するということについて考えを深めることができた…（ⅱ）
・自らの受けてきた教育制度の意義について新たな視点を獲得した
〈反省点〉
・ハーバード生に対して、事前にセクションの理念や目標などを伝える時間を確保できなかった
・FW 先の決定が遅れ、事前勉強に割ける時間が少なかった

⑤各企画詳細

≪茶道体験≫　3 月 23 日（3 日目）

１．企画内容

茶道の諸作法の勉強会、東京大学裏千家茶道サークル主催の茶道体験

２．企画背景

日本の大学の特徴として、サークル活動が充実していることが挙げられる。しかし、そういった場において学べることは何か、ということは意識することは少ない。また、教養としての茶道といった側面を考えたとき、現実にどういった機会を利用してそうした祖国の教養を学んでいくのかといったことについても異国の学生と話し合いたいと考えた。こうした背景から今回の茶道体験の運びとなった。

３．目標

ⅰ）教養教育としての茶道を体験し、日本の伝統文化を学ぶ機会に触れる

ⅱ）大学でのサークル活動を通し、課外活動から学べることについて考える

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・日本の伝統文化に興味を持ってもらえた

・日本の大学のサークルについて知ってもらえた

〈反省点〉

・知ってもらうという姿勢が強すぎて、議論のレベルまで達しなかった

・自分たちの知識不足で、茶道に見られる奥ゆかしさ等を十分に伝えきれなかった

≪日本科学未来館見学≫　3 月 23 日（3 日目）

１．企画内容

日本科学未来館見学

２．企画背景

学校の課外活動の一環としての遠足や修学旅行はしばしば「学びの場」でなく「遊びの場」としてとらえられることが多い。こうした現実に対して、我々は疑問を投げかけ、もう一度考えなおす機会が必要であると考え、日本科学未来館を見学した。

３．目標

学校の課外授業などにも利用される、公に向けた学習機関としての博物館が、どのように人々の知識向上、学習意欲の増大に関わっているのかを実際に体験して学ぶ

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・普段触れることの少ない最先端技術を人々にいかに親しみやすくわかりやすく工夫して作られているかを体感できた

・英語の解説も豊富でハーバード生も日本の技術についてくわしく知ってもらえた

〈反省点〉

・時間の組み方の問題か、閲覧できた展示が少なく若干内容が時間に対して薄くなった

・展示の面白さに目が行き、目標のような論点に関する議論まで発展しなかった

≪専門学校訪問≫ 3月24日（4日目）

１．企画内容

岩崎学園横浜リハビリテーション専門学校を訪問し、ⅰ）概要説明　ⅱ）施設見学　ⅲ）質疑応答　を行った。

２．企画背景

日本の教育制度において、専門学校はなじみの薄い教育機関であり、えてして大学といった高等教育機関に比べ、下位の教育制度に見られがちである。しかし、実際にどんな教育が行われているかといったことに関しては、学生は無知であることが多く、行ってみなければわからないという現実がある。また、学力偏重の日本の教育制度において、さまざまなキャリアサポートを行っている岩崎学園の校風は特異なものである。こうした背景から我々は、専門学校に対して一種の偏見をなくすために、実際に専門学校に訪問した。

３．目標

ⅰ）専門学校に対する考え方の転換

ⅱ）学力にとらわれない教育制度という考え方の獲得

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・施設見学を通して、技能教育を行う専門学校を知ることができた

・さまざまな実践的な器具や、休日にもかかわらず学校に来て練習を行う生徒を見ることで、専門学校の重要性を認識することができた

〈反省点〉

・見聞きだけで体験的な要素を取り入れることができなかった

・春休みという期間上、授業が行われず、生徒との交流も少なかった

≪臨海セミナー（学習塾）見学≫ 3月24日（4日目）

１．企画内容

室長による講演、受験生とハーバード生との対話、塾内見学、授業見学

２．企画背景

日本の大学受験科の塾を実際にハーバード生に訪問してもらい、受験生の声や、塾の授業を見学してもらうことで、日本の塾の特殊性や独自性やその役割、そして日本の大学受験制度の利点、欠点を知ってもらおうと思った。

３．目標

ハーバード生に日本の大学受験の実態を知ってもらい、アメリカの大学受験生度と比較して、それぞれの利点、欠点を考えて、ハーバード生の日本の教育制度に対する自分の考えを持ってもらう

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・ハーバード生が日本は何で英語の授業を日本語で行うのか、なぜ日本の学校は塾に頼るのかなど、日本の教育方法や教育制度に対して疑問を持ってくれたので、実のあるディスカッションを行うことができた

・日本の大学受験生と実際に話をして、熱心な受験生からいい刺激を与えられたとハーバード生が感じてくれた

〈反省点〉

・室長と通訳との連絡が不十分で、室長の講演内容が十分に理解できず、ハーバード生に英語で伝えきれなかった

≪日本教育大学院大学訪問≫　3 月 25 日（5 日目）

１．企画内容

ⅰ）日本教育大学院大学次期学長や教授ら（パネラー）によるスピーチ

ⅱ）教授陣を交えた「理想の先生」についてのディスカッション

２．企画背景

いつもは教育の受け手である我々学生は、教育の施し手としての「先生」の視点から教育について立ち止まって考えることは少ない。また、制度的にも内容的にも教育が高度になるに従い、先生と児童・生徒・学生の距離は広がる傾向にある日本教育において、その問題を他国の学生と議論する場を設けたいと思い、実質的な教職大学院である日本教育大学院を訪問した。

３．目標

ⅰ）教育の提供者として視点を教師という切り口から獲得する

ⅱ）「理想の先生」について、実体験に基づきつつも考えを共有し、深めていく

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・前日（24 日）の塾訪問の際にお話してもらった内容（なぜ日本が学歴社会になってしまったのか、社会の求める人材の変化により日本の教育が変化しているその実情）をより詳しく説明してもらったことでハーバード生により深く日本の教育を理解してもらえた

・理想の先生像に関する日米の相違が明確になり、理想の教育とは何か、という問いに対する模索する解の一助になった

〈反省点〉

・時間が短かったこともあり議論が中途半端で終わってしまった

・一般的な答えとして理想の先生とは何か、を議論するにはあまりに抽象的であり、結論を出すという趣旨の議題ではなかった

ii. セクション別フィールドワーク

産業セクション

①セクション内容

ｉ）トヨタ本社訪問

ⅱ）日本未来科学館見学

ⅲ）東京ミッドタウン訪問

ⅳ）ファッション企画

ｖ）トヨタ工場見学

②背景

「産業とは、社会構造を形成するものであり、それは教育によって生まれた個人や団体の生産、消費、流通活動の結果である」という見方に立って、技術力、都市開発、マーケティングなどあらゆる経済的、技術的な観点から、今現在の日本産業の全体像を俯瞰するプログラムを編成した。

③目標

ｉ）様々な経済的、技術的な観点から日本産業の全体像を俯瞰する。

ⅱ）産業を通して、日本の教育の良い点を再発見し、今後の世界における教育にどう組み込むか考えるにあたっての材料とする。

④セクションとしての達成点・反省点

〈達成点〉

・日本の最先端技術や産業にじかに触れることで、お互いの国の産業面についてより深く話し合うきっかけとなった。

・東大生にとっても日本産業の素晴らしさを改めて知る機会となった。

〈反省点〉

・教育と各フィールドワークを結びつける時間があまり取れなかった。

・企画の背景をハーバード生に説明する時間があまり取れなかったため、理念を理解してもらっているかが不明確であった。

⑤各企画詳細

≪トヨタ本社訪問≫ 3 月 23 日（3 日目）

１．企画内容

第１部：トヨタ社の環境に対する取り組みや、燃費効率の飛躍をもたらした新技術などについての講演をお聞きした

第２部：必要な時だけガソリンを使い、それ以外は家庭用コンセントで充電した電気で走るプラグインハイブリットカーを前に、どのような技術が組み込まれているか解説していただき、実際に試乗した。

２．企画背景

現在地球は様々な環境問題を抱えており、「持続可能な社会」は多くの産業にとってもキーワードとなっている。その中でトヨタ社は以前からハイブリッドカー、プラグイン自動車などで自動車産業における環境への取り組みを先導してきている。今回はトヨタ社を訪問させていただく中で、環境対策と産業がいかにして結びつくのかについて考えた。

３．目標

トヨタ社の環境問題への取り組みに触れて、今後の産業に必須のテーマである「持続可能な社会」、及びそれを支える技術について考える。

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・英語での解説であり、ハーバード生にとって齟齬なく内容を理解できた。

・講演には、持続可能な自動車、持続可能な工場による先導、持続可能な社会的貢献という３つの軸があり、幅広い知識が得られた。ハーバード生からも多く質問がでた。

〈反省点〉

・トヨタ社にご協力をお願いする際に HCAP 内の連携が不十分だったためにご迷惑をかけしてしまった。

・例えば、ハイブリッドカーの仕組みやトヨタ社の概要など、ハーバード生に事前にもっと情報を提供していたら、当日より多くのことを吸収してもらえたと思う。

≪日本未来科学館見学≫ 3 月 23 日（3 日目）

１．企画内容

日本未来科学館見学

２．企画背景

日本科学未来館は、科学技術を文化として捉えることでその社会に対する役割と未来の可能性について考え、語り合うための、全ての人々にひらかれた場である。先端を行く「新しい知」を分かち合うことで、一人ひとりが未来を見つめ、かしこく生きて

いける社会の実現を目指す。そうした考えを持つ日本科学未来館を訪れ、社会と広く分かち合うことで科学技術が未来に対して果たす役割についてハーバード生とともに考えていこうという思いでこの企画を立案した。

３．目標

ｉ）日本の技術力の高さを再確認してもらう。

ⅱ）日本の教育に対する熱意を知ってもらう。

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・技術力の高さについてハーバード生もかなり興味を示し、感心してくれていた。

・日本未来科学館のような、知的好奇心をくすぐるような博物館・科学館はアメリカにはないと、日本の最先端技術の展示の仕方に関心を抱いてくれた。

〈反省点〉

・ロボットの説明は日本語だったので、ハーバード生の完全な理解は難しかった。

・解説をしてくれる教授とハーバード生との間で、あまり交流の機会を設けられなかった。

≪東京ミッドタウン訪問≫ 3 月 24 日（4 日目）

１．企画内容

東京ミッドタウン開発プロジェクトについての DVD と模型による説明、質疑応答

２．企画背景

池袋、新宿、渋谷という副都心に代わる新しい形の街としての六本木の都市開発プロジェクトは 2008 年に優れた都市開発事業に贈られる ULI 賞を獲得した。技術と自然の融和の中に生まれる、人の住みよい街づくりプロジェクトに未来の都市の在り方を見出したいと考えた。

３．目標

東京ミッドタウン開発の際のコンセプトについて学び、東京ミッドタウンが六本木という街においてどのような存在価値を提供しているかを考える

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・複合機能都市として、衣食住・職場・公園・ホテルなどを提供し、人々にとって住みよい街としての役割を果たしている様子を理解することができた。

・居心地の良い空間づくりのための複数の建物の立地、地下街の整備、デザインの創造などの配慮を随所に確認することができた。

〈反省点〉

・時間の問題により、説明を受けた全ての個所に関して実際の目で確認することができなかった。

・実際にミッドタウンを訪れている人や住んでいる人の意見を取り入れることができなかった。
・東大生が説明後の自由時間の間に行った質問（東京ミッドタウンの詳細部）を十分にハーバード生に伝えられなかった。

≪ファッション企画≫ 3 月 24 日（4 日目）

１．企画内容

東京ガールズコレクション（TGC）の概要説明 DVD の鑑賞、チーフプロデューサーの永谷亜矢子様による講演

２．企画背景

日本の若者ファッション産業は、アメリカのファッション業界にはあり得ない形態を持っており、その特異性ゆえにマーケットでの新たな可能性を見出せるのではないかと考えた。また、携帯電話を用いた新しいマーケティングの方法は、日本特有のものでこれからの若者ファッション業界を牽引する可能性もあり、日本の若者ファッション産業から何か発信・提案できるのではないかと考え、大きなムーブメントを起こしている TGC に注目してこの企画を立案した。

３．目標

ⅰ）いま一番マーケットの中で反応のいい 10 代から 20 代の F1 層に対する、日本の携帯電話端末という強みを使った経営戦略について学ぶ
ⅱ）今後のマーケットで強い勢力を持つだろう若者の観点を取り入れた顧客がニーズを作り、マーケットを開拓していく形を理解する

４．達成点・反省点

〈達成点〉
・アメリカと日本のファッション業界の違いが顕著に知ることができた。
・携帯電話が web を用いて新たな市場を拡げたことは、ハーバード生にとっては驚きであったとともに、新しいビジネスの形を考えるきっかけになった。
・TGC が地域産業活性にも貢献していることを知り、ファッション業界という一つの業界が他の業界と提携したり、他の業界に影響を与えたりすることで、新たなビジネスを生み出すという形態を学ぶことができた。

〈反省点〉
・アメリカと日本のファッション業界が大きく違っていたために、前提として共有できる部分が少なく、予想していた箇所、注目してもらいたかった箇所に質問がでなかった。
・TGC の社会への影響力を事前に十分に伝えきれていなかった。

≪トヨタ工場見学≫　3 月 25 日（5 日目）

１．企画内容

第１部：トヨタ工場にて、主に自動車の組み立てラインのツアーに参加して見学した。

第２部：燃費改善のための最新技術や一人乗り用自動車などが展示されているトヨタ会館を見学した。

２．企画背景

現在の大学教育では、教育が最終的に達する“技術”に触れる機会があまりにも少ないという問題意識から産業の第一線に触れることで新たな教育の形を見出すヒントが得られると考えた。今回のプログラムでは、世界でも有数の自動車企業であり日本の産業を支えるトヨタ社を訪問し、最新の技術に触れることで、新しい教育の形には何が必要か模索しようと考えた。

３．目標

ⅰ）産業を支える技術に触れることで、自分たちが学んだものがどのように社会に還元されるかを考える。

ⅱ）様々な技術がどのように組み合わさって一つの産業となるのか、実際に見て考える。

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・英語での解説で、内容を理解しやすかった。

・技術者の声も展示されており、産業を構成する技術ひとつひとつに注目して見学できた。

・トヨタ会館では様々な次世代技術の展示があり、技術の素晴らしさに驚嘆するとともに、産業を発展させるに伴う負の側面、たとえば環境破壊や進化、倫理的な問題にまで議論することができた。

〈反省点〉

・日本側の準備が不十分でハーバード生に自動車産業の日本での位置づけなどバックグラウンドを十分に落としこめなかった。

iii.　セクション別フィールドワーク

精神セクション

①セクション内容

ⅰ）茶道体験

ⅱ）日本庭園訪問

ⅲ）古武術実演

ⅳ）ファッション企画

ｖ）伊勢神宮参拝

②背景

島国として発展してきた日本の特有の精神の、様々なものを実際に経験してもらうことで、日本人に伝わる精神を少しでもハーバード生に掴んでもらおうと考えた。そのためにいくつかの精神に特化することなく、日本の精神を表しているものを広く選んでプログラムを組んだ。

③目標

ⅰ）あらゆる体験を通じて日本の精神を感じてもらう

ⅱ）自分たちもそれらの体験を通じて日本の精神を再確認する

ⅲ）体験後、お互いの見解を述べ、これからの世界でどのようにこれらの精神を活用・伝えることができるかについて考える

④セクションとしての達成点・反省点

〈達成点〉

・どの企画でもハーバード生たちは大いに興味を示し、自分たちから積極的にそのしぐさや考えを取り入れようとしていた。…（ⅰ）

・企画の準備の過程で自分たちも、日本の精神についてより深い理解を得られた…（ⅱ）

・予定ではフィールドワーク後毎晩（ⅲ）のためのディスカッションの時間を設けるはずだったが、フィールドワーク中や移動中にフィールドワークの内容について議論することが多く、普通の観光ではできないような熱い議論ができた。…（ⅲ）

〈反省点〉

・取り扱う精神に、結果的に偏りができてしまい、日本の一面しか見せられなかったことが懸念される。

⑤各企画詳細

≪茶道体験≫　3 月 23 日（3 日目）

１．企画内容

・茶道におけるお点前体験（茶室でおもてなしを受ける体験）

・実際にお茶を点てる体験

場所：柏蔭社

協力：東京大学裏千家茶道同好会

２．企画背景

精神セクションにおける３つの目標にかなうべく、肌で直接体験しやすく、かつ外国人が雰囲気を掴みやすいであろう茶道体験をプログラムとして選択した。

３．目標

茶道の作法を学ぶことで、日本人固有の精神や茶道の世界観に触れる。

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・参加者が次々と茶道、日本の精神について質問したことで彼らにとっても、それらを調べて答えた自分ら運営側にとっても茶道の新たな知識を得ることができ、日本の精神を考え直すきっかけとなった。

・同じ体験を共有することで、日本人と外国人の日本の精神に対する捉え方の違いが明確化し、いままでに無かった視点を得たことで理解が深まった。

〈反省点〉

・互いに日本精神の在り方についての議論にとどまってしまい、世界に発信・活用することまで議論が至らなかった。

・上述の理解、議論にきちんとした時間が割り当てられていた訳ではなく、移動時間や空き時間での会話の範疇になってしまった。

≪日本庭園訪問≫　3 月 23 日（3 日目）

１．企画内容

第一部：東京都立浜離宮恩賜庭園の見学

第二部：東京ミッドタウンの見学

２．企画背景

人工的につくられた庭園は日本の美意識の縮図でもある。五感全てを使ってそれを楽しみ、実感してもらいたいと考えた。また、庭園内でのお花見を通じて日本人の美意識の根底にある花鳥風月の精神も満喫してもらいたいと思った。

３．目標

ⅰ）ハーバード生・東京大学生共に浜離宮恩賜庭園で日本古来の美意識を実感し、それらの根底にあるものについて考える。

ⅱ）ガーデンや多くの現代アートを含む東京ミッドタウンを見学し、浜離宮恩賜公園との違いや共通点を見る。

ⅲ）日本古来の美意識について考え、現代にどのような形で残っているか考察する。さらに、それが日本および国際的な社会にどのような影響があるか、ありうるかを考える。

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・浜離宮の観光は前後の茶道体験や伊勢神宮訪問との相乗効果をなし、日本古来の美意識や、その根底にある精神をより深く理解することができた。

・東京ミッドタウンにおいて次世代の建築や植物を取り入れた現代アートにも触れる

ことができ、現代の芸術観を確認することができた。

〈反省点〉

・古来、および現代の美意識を確認することはできたものの、それを各学生間で確認しあい、議論することができなかった。

・日本の精神の一部の理解に終わり、直接的に発展的な方向に向かわなかった。精神セクションの目標（iii）への達成に直結しなかった。

≪古武術実演≫　3 月 24 日（4 日目）

１．企画内容

松聲館師範の甲野善紀先生による体験型の古武術講義

２．企画背景

日本の伝統的な知識や技法が現在に生かされているものを考え、現代、介護やスポーツに応用されている古武術に注目した。

３．目標

明治維新以前の伝統的な身体技法をハーバード生に体験してもらい、現代生活に古武術がどう生かされているかを学ぶ。

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・現代の常識を覆すような身体技法を実際に体験することで、ハーバード生の古武術に対する興味・関心を喚起することができた。

・介護やスポーツに生かされる技だけでなく、普段の生活にまで応用できる古武術の知識を得ることができた。

〈反省点〉

・企画の段階で、古武術という専門知識を必要とする分野であり通訳が困難だったため、先生と通訳者の事前の打ち合わせを十分行うべきだった。

・甲野先生や古武術に関する予備知識を直前ではなく、もっと早い段階、例えば東京カンファレンス前に知っていれば、より深い講義になったと考える。

≪伊勢神宮参拝≫　3 月 25 日（5 日目）

１．企画内容

伊勢神宮参拝。神宮司庁広報室広報課、三輪和平様にご協力いただき英語で神宮の見学を、また神楽殿にて神楽と呼ばれる神人一体の宴を催す場での歌舞をとり行っていただいた。

２．企画背景

太古から日本で信仰されてきた、日本にその起源をもつ神道。そこに日本人の精神に根差すものが眠っていると考えた。そのため、神道で最も尊いとされている伊勢

の神宮を参拝し、その空気を直に体験してもらおうと考えた。

３．目標

神宮への参拝を通して、日本人の自然観や宗教観から日本人の精神へとアプローチすること。

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・伊勢神宮の自然と歴史が織り成す神秘的な空気や神楽殿での歌舞には、ハーバード生も非常に感動を覚えたようで、伊勢神宮を選んで正解だと感じた。

・神宮や神道に関する説明にも興味を示して、Gods とはニュアンスの異なる日本のKamiについての説明の後は､ハーバード生も自然にKamiを使うようになるなど､､日本の宗教観を積極的に理解しようとする姿勢もあり、実際に足を運んだ甲斐のあるプログラムとなった。

iv. 全体でのプログラム

京都企画　　3 月 25 日～26 日（5～6 日目）

①企画内容

旅館宿泊、金閣寺散策、文化体験（後段詳述)、清水寺散策

②企画背景

「ガイドブックに載っているいつもの京都」は観光客として体験できるが、「ガイドブックに載っていない意外な京都」はなかなか体験する機会がない。さらに京都の都市づくりや街並みの雰囲気は、東京と違ってどこか時間がゆったり流れ落着きを払っているように見える。一方で、観光都市としての整備はしっかりとなされ、国内外を問わず多くの観光客でにぎわっている。こうしたさまざまな京都の姿をとらえることで、日本の都市の多様性に焦点を当てると共に、京都自体の再発見も試みようと思い、本企画を行った。

③目標

ⅰ)「ガイドブックに載っている（いない）京都」を発見する

ⅱ）東京との比較によって日本の都市の多様性を見る

④達成点・反省点

〈達成点〉

・世界に名だたる京都をさまざまな側面からとらえることができた。

・実際に京都市内を散策することで京都の雰囲気を体感できた。

〈反省点〉

・現地のボランティアガイドとの連絡が遅れて協力を得られず、観光所では浅い説明に終始することになってしまった。

・お花見シーズンだったため、移動などに予想以上に時間がかかると共に、公共交通機関の供給が追い付かず、予定の行程を変更せざるを得なかった。

⑤各プログラム詳細

≪町家訪問≫ 3 月 26 日（6 日目）

１．企画内容

町家訪問、町家暮らしの紹介、異文化コミュニケーションについてのお話

異文化コミュニケーションについてのディスカッション

２．企画背景

京都の実際の生活を想像してみても、ハーバード生はおろか、日本に住む我々でさえ思い浮かばないことがある。さらにそこに感じられる京都の雰囲気は、長年住み慣れた人でないとわからないし、外国の生活様式から見た京都に対する視点はなおさら複雑である。こうした異文化との遭遇を実際に体験し、内在化していった経験者としてのお話を伺いたく、ジェフ・バーグランド教授の住む町家を訪問した。

３．目標

ⅰ）町家の暮らしにおけるキーワード「自然との共生」を肌で感じ取ること

ⅱ）異文化コミュニケーションについて考えを深めること

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・町家の中に見られるさまざまな日本人の知恵や考え方を知ることができた

・文化の表面にとどまらない、意外な常識や深い価値観についてまでディスカッションすることができた

〈反省点〉

・日程が押していて、清水寺散策の時間を削ることになってしまった

≪和菓子手作り体験≫ 3 月 26 日（6 日目）

１．企画内容

京菓子店での和菓子手作り体験

２．企画背景

日本の和菓子作り体験には食べるだけでない楽しみがある。つまり、自分だけの和菓子を作るといった楽しみから、作った和菓子を見て楽しむといったところまで。そういった日本の奥ゆかしさなどといった精神性・文化背景を少しでも感じ取ってもらうと共に、

和菓子作りの技術がいかに伝承されるかといったことにも考えを広げていきたい。

３．目標

ⅰ）日本のほかの文化にも共通する、四季の変遷を重んじる精神性を実感してもらう

ⅱ）今まで体験してきた日本の現在の文化と、伝統文化の関連性を感じてもらう

４．達成点・反省点

〈達成点〉

・ハーバード生自ら手を動かして体験してもらうことで、一つのお菓子に込める心や手間を理解してもらえた

・お菓子の形体と説明を通して、すべてを説明し尽くさない日本の文化を実感してもらえた

〈反省点〉

・解説が日本語だったので、英語で個別に説明することになり、企画の背景を完全に理解してもらうことが難しかった

v. 全体でのプログラム

≪高校生交流プログラム≫ 3 月 27 日（7 日目）

①企画概要

東京大学、ハーバード大学、日本国内の高校の各学生三者による交流プログラム

第 1 部：プレゼンテーション（大学生活について）

第 2 部：パネルディスカッション（有意義な大学生活について）

第 3 部：小規模ディスカッション（大学の意義について）

②企画内容

第 1 部では東京大学、ハーバード大学の担当者がそれぞれ校風や、大学生活についてプレゼンテーションを行った。他校の大学生活について知ることで自分たち自身を相対化することができた。第 1 部を通して他校の学校情報やカリキュラム、校外活動などについて広く知ることができた。

第 2 部では東京大学、ハーバード大学からそれぞれ６名ずつパネラーを出してパネルディスカッションを行った。有意義な大学生活に関する質問について複数人が視点を変えて意見を述べることによって、一つの問題に対しても色々な切り口があるということを実感できた。それにより、以降の第 3 部で意見を出すにあたっての準備ができた。

第 3 部では東京大学、ハーバード大学、高校生からなる１５名程度のグループでディスカッションを行った。第 1 部、第 2 部では全体でのプログラムだったのに対し、小規模グループでは意見が出しやすく、活発な意見交換が行われた。また、より具体的な話が多くできたことにより、それぞれの大学生活についてイメージするのが容易であった。

③企画の背景

高校までとは違い、大学では自由に使える時間が多くある。また、活動の幅も広がり大学生はやりたいことはなんでもできるといっても過言ではない。しかし、今まで大学生という時期をどう有意義に過ごしたらいいかについて真剣に議論する機会がなかったように思われる。そこで、まだ大学生になっていない高校生や文化の違う外国の大学生を交えての議論の機会を提供したいと考えた。

④目標

大学の意義という抽象度の高い議題について東大生、ハーバード生、高校生それぞれの立場から幅広く意見交換をし、3 部構成のプログラムにおいて最終的に議論を収束させ、提言を得る。この議論を通して、大学に関する日米、高校大学生のとらえ方の違いに触れ、自分の意見をぶつけて議論することでそれぞれが大学で何を学ぶかを見つめなおすのに良い機会としたいと考えた。

⑤達成点・反省点

<達成点>

・日米の教育制度や学生生活の違い、また高校生の視点が理解することができた。
・様々な活動に携わり、人と交流して真の友人関係や尊敬できる先達との関係を構築することが重要であるということがわかった。
・高校生にとっては今後の展望を考える上で大きな道しるべを得ることができた。

<反省点>

・最終的に提言化することができなかった。
・高校生をもっと討論に積極的に加える努力をして意見を抽出すべきであった。
・大学の意義という抽象的な議題だけでなく、もっと広く議題を取り上げることで幅を広げるべきであった。

≪ホームステイプログラム≫ 3 月 27 日（7 日目）夜～28 日（8 日目）午前

①企画内容

ハーバード大学生の一般家庭（実家）へのホームステイ

②企画の背景

ハーバード大学生が日常生活を日本人家族とともにすることを通して日本文化や日本の家族についてより深い理解を与えるのに良い機会を提供したいと考えた。

③目標

ハーバード大学生が日本文化を体験し、ホストファミリーと緊密な関係になり継続的な

関係が構築できればよいと考えた。

④達成点・反省点

<達成点>

・ホームステイ終了後のハーバード大学生の満足度が非常に高く、またホストファミリーとの仲もとても良かった。

・豪勢な食事と丁寧な接待の質の高さに、ハーバード大学生は日本家庭のおもてなしの精神を理解することができた。

<反省点>

・ホストファミリーとホームステイするハーバード大学生の詳細情報を事前に双方に伝えるのが遅れてしまった。

・日本の一般家庭でのマナーや振る舞い方のついて何らかの形で事前にハーバード大学生に伝えるべきであった。

vi.　全体でのプログラム

≪ディスカッション≫　3 月 28 日（7 日目）

①企画内容

第一部：セクション別フィールドワークの発表

第二部：今回のカンファレンスは交流プログラムとしてどうだったか？について、グループに分かれての議論

第三部：議論内容の発表

②企画の背景

私たちは、education＝すべての啓蒙的行為ととらえ、異文化を理解することも education に含まれると考えた。そこで私たちの今回のプログラムが、日本を理解するという視点から見て、どの点が良かったか、悪かったかについて議論したいと考えた。

③目標

ｉ）日本を理解するという視点から、今回のカンファレンスの良かった点・悪かった点それぞれについて、その理由・反省を行う。

ⅱ）国際交流プログラムには、いかなる条件が必要で、どういう点が見直すべきであるかを考える。

④達成点・反省点

<達成点>

・あえてハーバード生からフィードバックを貰うこともできる場を設けたので、カンファレンスの隅々に渡って指摘が得られた。

・記憶が新しいうちでの議論だったので、ハーバード生も含めて各々が、カンファレンスでの経験を個々人の中で落とし込み、昇華することができた。

<反省点>

・目標 ii のような話まであまり持っていくことができなかった。

・国際交流プログラムを考えるというテーマの設定が議論しづらいものだった。

5. 一年間の振り返り

i.　プログラム内容について

一般観光との差異化をはかりＨＣＡＰ独自のプログラムにするためには、早期にプロジェクトを始動し、協力企業との打ち合わせを密にとる必要性を感じた。自分たちが何をやりたいのか、プログラムを通して何を伝えたいのかということを明確にし、熱意をもって企画・運営することでもっと大きな物を得られたと思う。

また、セクションの域を越えたコラボ企画については、セクション間の情報共有が不十分であった。その為に責任の所在もあいまいで、不完全燃焼となってしまった。これは、コラボ企画の意図が曖昧であったこと、また、メンバー全体に共有できていなかったことに起因する。

個々のプログラム自体の完成度は高かったが、全体として何を伝えたかったのかという総合的な面でもう少し改善が必要だと感じられた。

ii.　プログラム事前準備について

カンファレンス全体を通して、どうしてもドタバタしてしまった。事前のシミュレーションが徹底されていなかったこと、必要なルール作りがなされていなかったことなど理由はいくつか考えられる。メンバーの意識をＨＣＡＰに集中させることができず、カンファレンス実施直前に思うように集まることができなかった。

緻密に計画を立て、実行することの重要さに気づくことができた。

iii.　引き継ぎについて

２期３期の引き継ぎでは、各役職が下の期の同じ役職のケアを行う、という方針のもと引き継ぎが行われたが、やはり２期３期の隔たりが存在した。上の学年に頼りきってしまうのは問題だが、私たちの期でもまだ上下のつながりが薄く、気軽に相談するということはあまり起きなかった。

３期４期の引き継ぎでは、今以上に引き継ぎに注力し、下の学年が上の学年に気軽に相談できる関係を作り、同じようなミスをさせたりせず、よりよいプログラムになるように、アドバイザーとして４期につきたいと思う。

iv.　渉外について

引き継ぎに関連して言えることではあるが、上の期から引き続いての渉外をさせて頂いたところに対して、担当者の引き継ぎをきっちり行わなかった。来期からは、9 月まで渉外先には３期の担当者も随行し、担当者の引き継ぎをきっちり行いたい。

また、以下の予算とも関連して、資金面のご協力をお願いするにあたって、一口当たりの協賛金を少なく、もっと広く様々な人にアプローチをしていくことができなかっ

た。今回のような不況の下では、このような資金協力をお願いすべきではあるが、広く様々な人にアプローチする方法が難しく、またそこまでしようという意気込みがメンバー全員に共有されていなかった。来期にはこの面でもケアをしていきたいと思う。

v.　予算について

今年度の予算編成に関しては、まず各プログラム毎に企画や必要な費用の見積もりを行い、最終的にそのまま予算に組み込むという形をとった。

また、見積もりにくい費用に関しては昨年度のものを参考にさせてもらった。以上のようにして作り上げた予算をもとに渉外活動を行ったが、世界的な大不況の最中、資金が十分に集められなかった場合の代替予算を作成するなどして対策を練る必要が十分にあった。

実際にカンファレンスを実施するにあたっても、厳正なるルールの徹底や会計処理の非効率による弊害が見られたので、会計システムの必要性を認識させられた。

しかし、システム面での不具合はあったにしても、予算の切り詰めの方はうまくいった。特に食費を削ることで大幅に節約することができた。